



大津の町なみと祭り

奈良女子大学生活環境学部
助教授 増井 正哉

はじめに

現在の大津市は、江戸時代以来大津町と呼ばれていた地域を中心に、堅田、坂本、膳所、などいくつかの地域が集まって成立しました。それぞれの地域は長い伝統をもち、特徴のある町なみが残っています。堅田、坂本の町なみはこのシリーズで紹介された通りです。しかし、大津の中心部・旧大津町の町なみはあまり知られていないのではないでしょうか。ここでは、旧大津町・とくに大津祭に曳山をだす地域の町なみを紹介します。

都市としての伝統

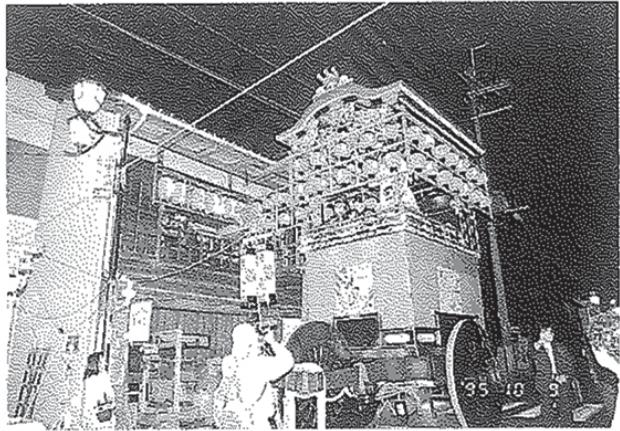
ここで、大津町の成り立ちについて見ておきましょう。大津の都市としての伝統が古代大津京にはじまることはいうまでもありませんが、比較的短期間で廃されてしまいます。本格的な繁栄をみるのは平安時代にはいってからです。湖上水運を利用して平安京に運ばれる物資の集散地、つまり平安京の外港として、また、平安京にもっとも近い東海道の宿駅として、大津はこの時代の流通の重要な集

散地になります。すこし時代は下がるのですが、『源平盛衰記』に「大津の在家二千八百五十三宇」が消失した記事が見えます。また「石山寺縁起」や「一遍上人絵伝」には当時の町なみの様子が描かれており、都市としての景観を呈してきたことがわかります。中世には延暦寺のお膝元、坂本が京都の外港として発展しますが、東海道と北陸道の分岐点に立つ大津の重要性は変わることろがありませんでした。大津の馬借（馬の背を利用して物資を輸送した運送業者）の活躍はよく知られています。

このように大津はその地理的な特性から、ついに都市として繁栄してきたのです。しかし初めて本格的な町づくり（都市計画と言えてもよいかもしれません）が、おこなわれるのは、天正14年（1586）、豊臣秀吉が坂本城を廃し、浅野長吉に命じて大津城を築かせた時です。この時の町づくりの具体的な形はよくわかつていませんが、城の移転に際して坂本の多くの住人が坂本から大津へ移住した



図1 江戸時代・大津の中心地だった札の辻
(近江名所図会より)



大津祭曳山と町会所

と伝えられており、道や水路の整備も含めた城下町の建設が行われたようです。ところが、慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦の前哨戦が大津で戦われ、城下町は大きな被害を受け、荒廃してしまいました。

この戦いのあと、大津は徳川家康の直轄都市となります。慶長6年、膳所に新しい城が築かれ、大津城の跡地には代官所がおかされました。慶長7年には家康は大津の地子（土地にかかる税）免除をおこなって、町の振興策をとります。家康は膳所を軍事の中心に、大津を純粹な商業都市として位置づけたようです。

大津百町と大津祭

こうして、徳川氏代官の支配のもと、大きな被害を被った市街地も徐々に、整備されていき、17世紀の半ばには、完全に復興したようです。以後江戸時代を通して、大津には東国・北国の大名や天領から集められた米が荷揚げされ、また、東海道の重要な宿駅として発展をつづけます。大津の人口は元禄12年

（1699）には1万7千人を数え、東海道では江戸、京都に次ぐ都市に成長します。「大津百町」という呼び方は、こうした繁栄の様子を伝えてています。

当時の市街地の形態を見てみると、琵琶湖に平行して走る京町通（東海道）、中町通、浜町通の3本の通りとそれに直交する通りによって、短冊状の街区が形づくられていました。東海道の札の辻から北にのびる道の東側のほとんどが天孫神社の氏子町で、物資の集散地らしく蔵屋敷・米会所がたち、商業都市大津の中核部を占めたところです。この区域に曳山をだす町がすべて含まれています。

元禄8年（1695）に各町一斉に作られた各町の絵図が残っています。これをみると、各町のほとんどが街路をはさんで、両側に間口3~5間（約6~10m）・奥行15~20間（約30~40m）の町家がたち並ぶ形態をとっています。こうした空間の構成をもつ町のことを

「兩側町」といいます。そして両側町を単位にして、いわゆる「お町内」が形成されました。

それぞれのお町内では町定や町式目とよばれる規則をもち、家持町人（お町内に家屋敷を所有する町人）による自治、具体的には不動産や戸籍の管理など、現在では市役所や町役場であつかう仕事の多くがお町内で行われていました。もちろん、その費用も家持町人の負担によるものでした。お町内には町会所と呼ばれる建物をもつのが普通で、家持町人は町会所に集まり、さまざまなことがらを討議しました。町会所は現在でも各町に残っていて、寄り合いに使用されるほか、曳山の部材や懸装品（山をかざる装飾品）が収蔵されています。各町の境には木戸門が設けられ、夜には閉じられるのが普通でした。お町内は、社会的なコミュニティの単位であったばかりでなく、木戸門によって区画された空間的な単位でもあったのです。そして、大津祭ではお町内ごとに曳山がだされるのです。

大津祭は、大津市京町三丁目に鎮座する天孫神社（四宮神社）の秋の例祭です。現在、祭礼は毎年10月（陰暦9月）9日が宵宮、10日が本祭りで、本祭りの当日は天孫神社氏子の13か町から出された13基の曳山が、終日町々を巡回し、名実ともに大津を代表する祭りと言えます。

祭りに曳山が取り入れられた時期、つまり現在の大津祭の起源は慶長～元和年間（1596~1624）ごろといわれています。つまり、大津が関ヶ原の戦いの荒廃から立ち直っていく時期にあたり、建物がたち、人々が住みはじめるなかで、復興のシンボルとして曳山が作られていったのです。そして、お雛子や山の上で演じられる人形のからくりも、そのスタイルが整えられていきました。現在でも、曳山はお町内のシンボルになっています。大津祭は大津の町の歴史とともにあるといってよいでしょう。

大津の町なみの現状

ここで現在の町なみについて見てみましょう。筆者が行った1995年の分布調査によると、この地域の建物のうち約65%は木造で、そのすべてが平屋建か二階建でした。ほとんどが、2階部分の高い本二階建の建物で、大正終わりから昭和戦前期に建てられたものが多いようです。また一部ですが、江戸時代から明治にかけて建てられた2階部分の低いツシニ二階建の町家も見られます。こうした伝統的な建物が連続して残っていること、そして多くの人びとが住み続けていること（木造建物の約90%が居住用に使われている）が大津の町なみの特徴でしょう。規模の大きな町家が米を扱ってきた商家に多いことも、大津の都市としての伝統に深く関係しています。整然とした短冊状に街路が通っていることもある、総じて落ち着いた印象のある町なみといえましょう。

祭り日の町なみ

このような町なみも、祭りの日には大きく姿を変えます。宵宮では、祭囃子とともに町家の軒先の提灯に火が入り、町会所の前に建てられた曳山見物に入びとが集まります。町内の町家に山の懸装品を飾る当屋飾りを見るのも宵宮の楽しみのひとつです。当屋飾りは、お町内でも規模が大きく、伝統的な外観をよく残した町家で行われます。

大津祭の一番の見どころは、やはり10月10



屏風飾り分布図

日に行われる曳山の巡行です。巡行に先立って、各町家では曳山を迎えるために建物2階の通りに面した部屋を、屏風などで飾り美しくしつらえます。巡行がはじまると、通り側の窓を開け放し、窓の敷居に毛氈をかけて曳山をむかえます。曳山の上で演じられる人形のからくりを所望する家もあります。人々の窓がひらき、赤い毛氈で飾られた窓越しに家宝の屏風が垣間見える様は、大津祭独特の景観といってよいでしょう。筆者の調査では、地区の木造建物の5分の1で、屏風飾りを行っており、住民の祭りへの思いが伝わってきます。

祭りの日に、屏風をたてまわす行事としては、京都祇園祭のいわゆる屏風祭が有名ですが、しつらえ方がかなり異なります。祇園祭では、宵宮の夜、建物の1階部分、多くの場合には町家の店の間（通りに面した格子のある部屋）に飾るのです。ところが大津祭では、山の巡行当日に、2階の通りに面した部屋に飾るのです。祇園祭では、宵宮に訪れる観光客に家宝の屏風を見せるのが主な目的ですが、大津祭では、あくまで曳山を迎える席を飾る装置として屏風が使われているのです。

屏風飾りと町家のデザイン

ところで、このような屏風を飾る習慣ができたのは、いつごろのことでしょうか。先にふれたように、現在、大津の町家は本二階建ですが、江戸時代の資料や、明治大正期の写



町家と曳山

真をみると、大津の町家はツシ二階建がほとんどでした。昭和戦前期までは祇園祭の宵宮のように1階店の間でも格子をはずして屏風をかざる習慣もあったようですが、宵宮の人出が減るにつれて、1階の飾りは少なくなり、現在のような形態になっていったようです。

現在のような屏風飾りを、江戸時代や明治時代前期に建てられたツシ二階建の町家でおこなうのは困難です。ツシ二階建はもともと居室ではなく、天井が低くつくられています（もっとも、一部のツシ二階建町家では、祭りの見物席をしつらえるために、2階の床面を下げて、天井高を確保した例もありました）。明治後期以降、本二階建が増えるにつれて、2階の屏風飾りが盛んになってきたと思われます。

おもしろいことに、町家の2階を利用しておこなう屏風飾りが、逆に町家のデザインに影響を与えています。たとえば、京都の町家では、2階に座敷を設けるとき、かならず、奥の庭に面した側に座敷があります。ところが、大津では通り側に座敷を設けるのです。しかも床の間をもった立派な座敷です。また、その2階座敷の窓は、間柱がなく、幅2間(4m)以上の広いものです。ヒアリングによると、「祭りがよく見えるように、とくに大工さんにたのんで大きな窓をつくった」という町家もありました。年に1度のこととはいえ、祭りの日のしつらえが、町家のデザインに影響を与えていているのです。

おわりに

町家のデザインは、その地方の気候、風土や生業の影響を強く受け、独特のデザインが形づくられてきます。大津の場合は、それにくわえて、ハレの日の利用を考慮にいれたデザインなのです。人びとの大津祭への愛着と、歴史的な意味の重みが感じられます。

今、大津の町でも古い町家が取り壊されて、次々と新しい建物が立っています。町家の独特のデザインを生み出してきた先人の知恵に

学んでいきたいものです。

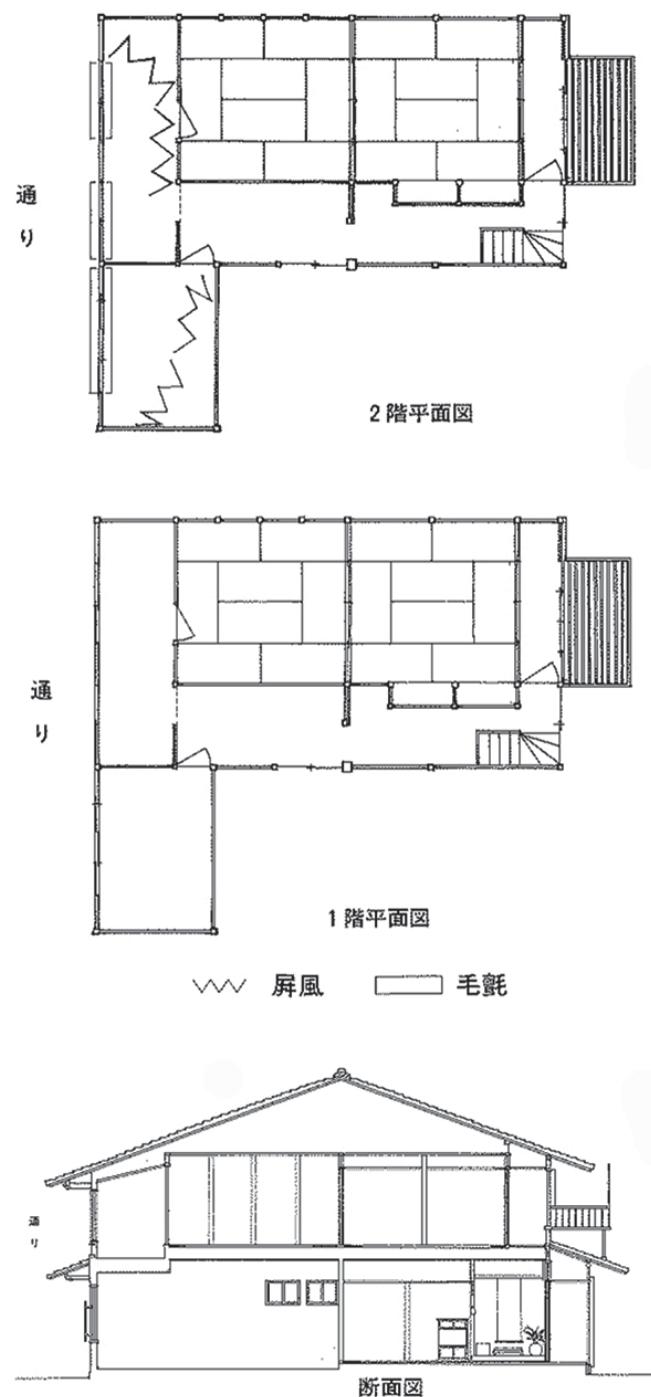


図3 大津町家の屏風飾り（通りに面した2階建部分の床が低くつくられている）

滋賀文化財教室シリーズ No.167号

発行年月日 1997年1月30日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525